

目的 無認可の乳幼児教育、福祉施設が都市、農村を問わず増加していることをその1、2で報告したが、このような無認可施設の成立過程を明らかにし、どのような要求が内在しているかを明らかにすることが本研究の目的である。今回はこの目的にそって過疎地域における無認可の幼児教育施設としてのへき地保育所と幼児教室を取上げた。

方法 高知県内で幼稚園、保育所のいすれをもとにない町村が3ヶ所あり、鏡村もそのうちの1村である。本村の4小学校区にへき地保育所1、幼児教室（小学校に併設）3、が設けられている。これらの4つの無認可施設について父母に対するアンケート調査と保母、教師、住民、行政当局に対する聴取調査を行った。（調査年月1975年11～12月）

結果 (1)へき地保育所は1964年働く父母の強い要求と運動によって設置された。(2)幼児教室はへき地保育所の設置が契機になって他の3校区にも設置された。(3)父母の保育所、幼児教室に対する要求の内容は主として教育要求であり、生活要求として顕在しない。(4)山村の核家族にとって母親の就労条件が厳しく、制限されている。(5)教育要求の内容が明確ではなく、幼児教室で行なわれている絵画、音楽教育に対する期待、要望が強い。(6)特に幼児教室の施設、設備は劣悪である。(7)へき地保育所、幼児教室の人件費（保母3人、教諭4人）は村財政が全額負担している。(8)父母はへき地保育所が認可されると保育料の負担が増えるので無認可でよいという声が多い。(9)過疎化が幼児の集団教育に対する期待をいっそう強いものにしている。